LGBTQ+当事者の老後の不安に関するアンケート調査

誰もが安心して過ごせる老後を目指して

PRIDE HOUSE TOKYO JAPAN 2020

「LGBTQ+」と「高齢期」の交差性に視座を

松中 権
認定NPO法人グッド・エイジング・エールズ　代表
NPO法人プライドハウス東京　アドバイザー／理事

日本のLGBTQ+等の性的マイノリティを取り巻く環境は、ここ10年で大きく変化してきましたが、2023年はとりわけ、顕著な進展があった1年でした。荒井勝喜元首相秘書官による差別発言に端を発し、G7広島サミット開催という契機に後押しされて成立したLGBT理解増進法。全国5ヶ所の地方裁判所のうち4地裁が、すべての人が法の下に平等であることに反すると、違憲判決を下した同性婚訴訟。性別移行のための生殖能力をなくす要件が、最高裁判所によって違憲と判断された性同一性障害特例法。世界から日本が遅れをとっていると言われてきたLGBTQ+に関する法整備が、各領域で呼応するように、ようやく動き始めました。

LGBTQ+当事者、非当事者を問わず、誰もが自分らしく生き生きと歳を重ねられる社会、お互いを尊重しエールをおくり合える社会を目指し、2010年に活動を開始したグッド・エイジング・エールズにとっても、2023年は大きな一歩を踏み出す年となりました。LGBTQ+の子ども・若者が抱える孤独・孤立の課題を解決し、安心・安全な居場所を提供するために2020年にオープンした、日本初の大型総合LGBTQ+センター「プライドハウス東京レガシー」を、より持続可能なものとするために、新たにNPO法人「プライドハウス東京」を立ち上げ、事務局機能を強化。セクターを超えたコレクティブインパクト型の協働を、より安定的に次世代に繋いでいけるように推進してきました。また、LGBTQ+コミュニティにおいて、子ども・若者と同様に孤独・孤立の課題が深刻だとされてきた、高齢期のLGBTQ+に対して取り組みを始動することとなりました。

今回、三菱財団のご支援を受けて実施した調査は、まさにその基礎であり、重要な土台であると認識しています。「LGBTQ+」と「高齢期」という交差性は、課題を可視化されにくくするだけでなく、課題解決の糸口を多層的で複雑なものにしてきましたが、本調査は多くの研究者の方々に対して次の研究の視座を提供するとともに、LGBTQ+関連の活動団体と高齢期に関する活動団体それぞれに、自分ごととして関心を持っていただくきっかけとなり、両者が協働する契機となったと確信しています。

今後、更なる輪が広がり、LGBTQ+のユースから高齢期までを包含する支援の取り組みや体制が進むこと、そして、当事者や非当事者を問わず、誰もが自分らしくあること、自分自身の人生に誇りをもったまま最期を迎えることを尊重し合える社会につながることを願っています。ご協力をいただきました全ての方々に、この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

高齢期を迎えるLGBTQ+当事者の課題解決に向けて

五十嵐 ゆり
NPO法人 Rainbow Soup　代表
NPO法人プライドハウス東京　共同代表

「年をとったら、みんなで同じ老人ホームに入ろう」。30代の頃、同世代のレズビアンの仲間たちとこんなセリフを言い合っては、笑っていました。「老後」という言葉は認識しつつも、どこか他人事で遠い先のこととして、おぼろげにしか捉えていませんでした。それでも次第に周りから、親の介護のこと、病気を患ったり手術をしたり、同性パートナーの病室にお見舞いに行けなかった、ということが、耳に入ってきます。しかし一体どうしたらいいのか、これからを真剣に考えなくちゃと思っても、まったく知識がありませんでした。

人生設計の中に「結婚」「子育て」は想定しておらず、良いパートナーに巡り会えればいいけれど、もしかしたらずっと一人かもしれない。いつまで働けるだろうか。病気、生活費、住まいのこと。先輩たちはどうしているのか。行政サービスを利用する時には、同性パートナーがいることや、レズビアンであることを伝える必要があるのか……。そんな漠とした不安感が押し寄せることもありました。

仲間と共に「NPO法人 Rainbow Soup」を立ち上げたのは、そうした将来に向けた不安感を背景に、必要な情報を集めて共有し、周りの仲間やLGBTQ+の人たちが少しでも安心して生きられるように、そして支援の輪を広げたいという思いからでした。発足から10年、LGBTQ+を取り巻く社会環境は大きく変化し、国や自治体をはじめ、民間レベルでも多様な取り組みが広がっていますが、LGBTQ+の「老後」「中高年」「高齢期」といった領域は、注目が集まりにくく、多くの課題が残されています。先人たちによる長年の尽力にも関わらず婚姻の平等は果たされず、実効力のある差別禁止法もなく、LGBTQ+の方々が人生の終盤を安心して迎えられる状況からは、まだ程遠い状況と言わざるを得ません。

先んじて関連領域の活動を続けている団体の経験を学びながら、今回の調査を活用した取り組みが広がり、少しでも課題改善につながることを心から期待し、微力ながらもその一助になりたいと考えています。

目次

■ はじめに（松中 権） 2
■ はじめに（五十嵐ゆり）／目次 3
■ 本調査の必要性（河野 禎之） 4
■ 調査概要 5
■ 調査結果 6-29
- 1. 回答者の属性分布 6-7
- 2. 現在の生活について 8-11
- 3. 老後の不安について 12-29
  - ・不安の内容 1位～5位 12-15
  - ・ジェンダー・アイデンティティ別　不安の内容 1位 16-19
  - ・性的指向別　不安の内容 1位 20-22
  - ・LGBTQ+別　不安の内容 1位 23-25
- 4. 老後の不安の「理由」と「解決方法」 26-27

■ 考察 28-29
■ LGBTQ+の高齢期における現状と課題（藥師 実芳） 30
■ あとがき（佐藤 洋輔） 31
■ プライドハウス東京レガシー案内 32

「LGBTQ+ 当事者の老後の不安に関するアンケート調査」の実施について

河野 禎之
筑波大学人間系

2023年6月23日に「性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」、いわゆる「LGBT理解増進法」が公布・施行されました。この法律は、さまざまな議論のもと紆余曲折を経て成立したわけですが、少なくとも LGBTQ+ の当事者を巡る社会的な課題の解決に向けて、大きな後押しとなる可能性があることには間違いないと思います。

この法律の条文に目を向けてみると、第４条で国、第５条で地方公共団体の役割が定義され、第６条では事業主等の努力として、事業主と学校における取組について記載されています。ここからも分かるように、社会のさまざまな分野・領域において、LGBTQ+ に関する意識啓発等の取組が推進され、差別の解消が進むことが期待されています。

一方、LGBTQ+ を巡る課題において、老後の問題が語られることはこれまで限られてきました。もちろんまったく扱われていなかったわけではありませんが、ユース世代や成人世代の問題に比べると話題になることは少なかったと言わざるを得ない状況だったと思います。この背景には、高齢期のLGBTQ+ の方々が置かれてきた社会的な状況が、現在と大きく異なっていたことも一因にあると考えられます。たとえば、1990 年に世界保健機関（WHO）が国際的な疾患等の診断分類である ICD を第 10 版に改定した際に、同性愛は脱病理化が図られました。言い換えれば、それ以前は 疾患として治療や矯正の対象とされていたということです。疾患として扱われていた時代において、当事者がそのことをカミングアウトすることが今以上に困難を伴うものであったことは容易に想像できます。それだけ、当事者やその課題が可視化されづらかったともいえるでしょう（「性同一性障害」という名称も、2018 年に発表された ICD-11では「性別不合」と改称され、「性の健康に関連する状態」として分類されたことで脱病理化が図られています）。

現在では以前に比べると LGBTQ+ を取り巻く環境は大きく変わりました。それらはすべての人にとって公正な状況にあるとまでは至っていませんが、多くの先人達による不断の努力の積み重ねによって状況が改善したことは間違いないと思います。このように状況が大きく変化する中にあって、老後の問題は大きな課題として横たわっています。なぜなら、ただでさえロールモデルを見つけにくいとされるLGBTQ+の当事者にとって、上の世代とは経験してきた環境が大きく異なるため、ライフプランを想像し、作り上げてゆくことは容易でない可能性があるからです。そのため、LGBTQ+ の当事者の老後の問題を可視化し、改善策を考えることは、私たちに残された課題であると思います。同時に、これから老後を迎える人、つまり現在の成人世代やユース世代にとっても決して他人事ではありません。自分たちの未来につながる重要な問題といえるはずです。しかし、現状ではそのことを話し合うための基礎となるような情報も、日本においてはほとんど可視化されていない状況にあります。

今回の調査は、LGBTQ+の当事者にとっての老後の問題を可視化するための第一歩として、それらさまざまな世代を対象として、どのような不安を感じているのか、そしてその解決のためには何が考えられるのかを探索的に明らかにするために取り組んだものです。これからこの領域に関心が集まり、LGBTQ+ の人も、そうかもしれないと感じている人も含め、誰もが安心して過ごせる老後の実現に向けて、広く語られるようになることを願っています。

LGBTQ+ 当事者の老後の不安に関するアンケート調査

誰もが安心して過ごせる老後を目指して

調査の目的
LGBTQ+ 当事者が老後に対してどのような不安を感じているのか、その解決方法は何が考えられるのかを探索的に明らかにし、今後の取り組みに向けた第一歩とすることを目的としています。

調査の時期
2023 年 6 月 3 日（土）～ 7 月 1 日（土）

調査の対象
LGBTQ+ 当事者の方、または何らかの LGBTQ+ 当事者かもしれないと感じている方

調査の方法
Web 調査（調査会社は用いず、SNS 等により協力を周知）

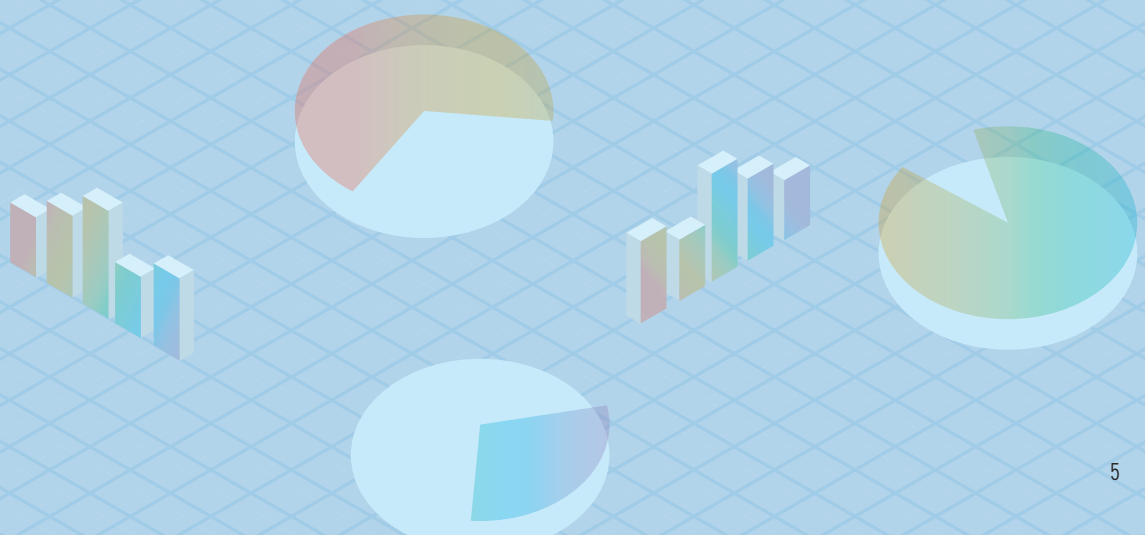
回答者数
333 名（有効回答数 333 名）

留意事項
各項目において欠損値があるため、合計値は必ずしも333名と一致しません。また本調査では日本に現在在住している方が対象のほとんどとなっていますが、一部海外在住の方も含まれました。

調査実施主体
認定特定非営利活動法人グッド・エイジング・エールズ

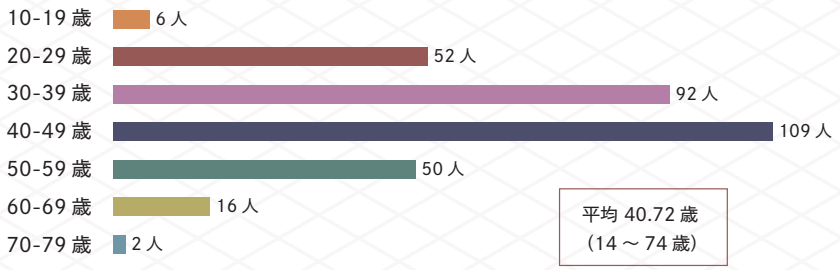
調査協力
佐藤洋輔（埼玉学園大学）
河野禎之（筑波大学）
特定非営利活動法人プライドハウス東京
永瀬大紀（筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群ヒューマン・ケア科学学位プログラム）
Lam Yan Tung（筑波大学人間学群障害科学類）

本調査は、公益財団法人三菱財団の助成を受けて実施をしています。

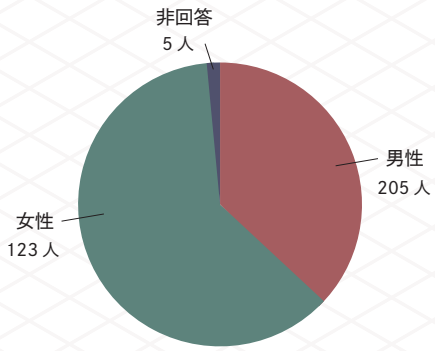


1. 回答者の属性分布

A. 年齢

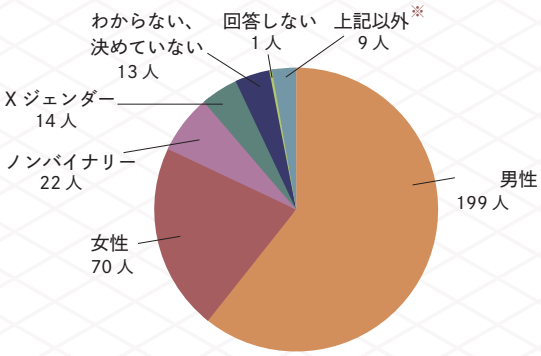


B. 戸籍上の性別



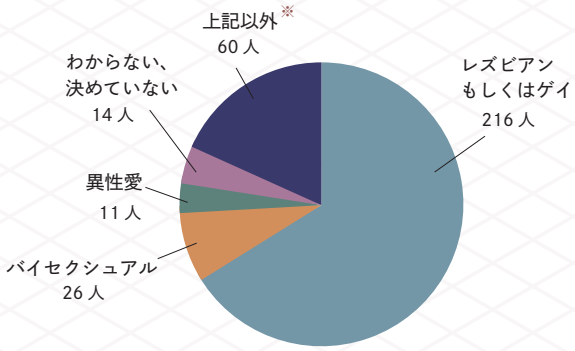
C. ジェンダー・アイデンティティ

※ C. ジェンダー・アイデンティティの「上記以外」の回答は右ページ (P.7) に記載



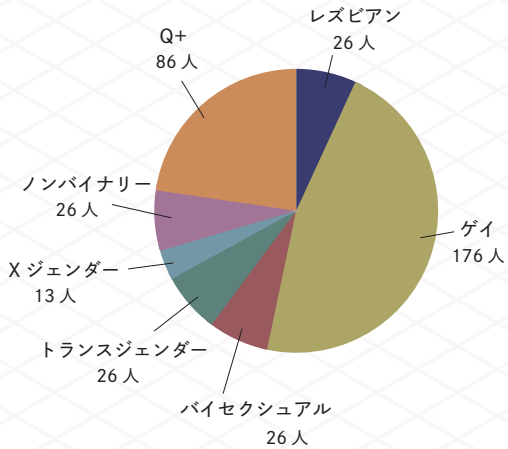
D. 性的指向

※ D. 性的指向 の「上記以外」の回答は右ページ (P.7) に記載



E. LGBTQ+ごと※ の人数比

※ LGBTQ+ 各カテゴリーの内訳は右ページ (P.7) に記載



※ C. ジェンダー・アイデンティティの「上記以外」の回答

・フルイド
・クィア、（広義の）トランスジェンダー
・ノンバイナリーでトランスジェンダー（FTM）でもある
・ジェンダーフルイディティ
・A ジェンダー
・戸籍の女性でも嫌ではありませんが、
一応 DSD（Disorder of Sex Development：性分化疾患）
・ジェンダーフェイ
・パンジェンダー
・中性
・デミマン／ Demiman（男性であることに違和感は無いが、
自身のアイデンティティとして全く重要ではない）

※ D. 性的指向 の「上記以外」の回答

・アセクシュアル（9 人）
・アセクシュアル、アロマンティック（7 人）
・アロマンティック（2 人）
・パンロマンティック、アセクシュアル（2 人）
・パンセクシュアル（13 人）
・アセクシュアル、Aegosexual
・アセクシュアル、アロマンティックと
パンロマンティックに近いクワロマンティック
・アセクシュアル寄りです
・アロマンティック、キュピオセクシュアル
・アロマンティック、アセクシュアル
・アンドロロマンティック、パンセクシュアル
・オムニセクシュアル
・クワロマ、エーゴセクシュアル
・クワロマンティック、アセクシュアル
・サフィック、若干 mspec
・バイロマンティック、アセクシュアル
・パンセクシュアル、デミセクシュアル
・ポリセクシュアル
・マセクシュアル
・愛と性欲の対象が一致しない
・性同一性に基づけばレズビアン
・戸籍上は同性愛だけど、同性と言って良いのか分からず
・自認が X なので、同性・異性が難しい。女性とされる人
が恋愛対象になることが多い
・自認が中性なので、ほとんどの人が異性になるが、
戸籍上という意味では同性愛
・自認上の同性愛（レズビアン）
・女性に向くが、それが同性／異性かと言われると
答えに困る
・心の性と同性愛
・性的欲求と愛する性が別々
・無性愛
・無性愛（アロマンティック、アセクシュアル）
・無理に分類するのならば全性愛だが、性別による濃淡は
かなりあるので、「全性愛」と言ってイメージされる実態
とは違う気がする。また、デミセクシュアル & デミロマン
ティック

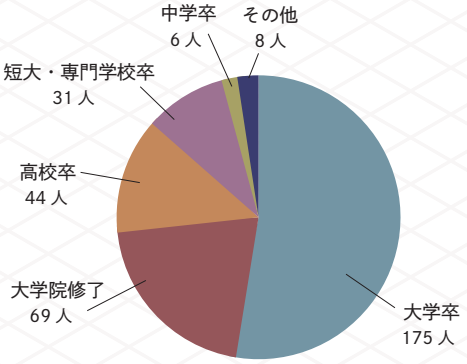
※ E. LGBTQ+ 各カテゴリーの内訳（延べ人数のため，各カテゴリーで重複している人もいます）

- **レズビアン**：シスジェンダー女性、トランスジェンダー女性に該当し、かつ性的指向について同性愛と回答した人
- **ゲイ**：シスジェンダー男性、トランスジェンダー男性に該当し、かつ性的指向について同性愛と回答した人
- **バイセクシュアル**：性的指向についてバイセクシュアルと回答した人
- **トランスジェンダー**：トランスジェンダー男性もしくはトランスジェンダー女性に該当する人
- **X ジェンダー、ノンバイナリー**：ジェンダー・アイデンティティについてそれぞれ「X ジェンダー」「ノンバイナリー」と回答した人
- **Q+**：ジェンダー・アイデンティティもしくは性的指向について「わからない、決めていない」もしくは「上記以外」に回答した人

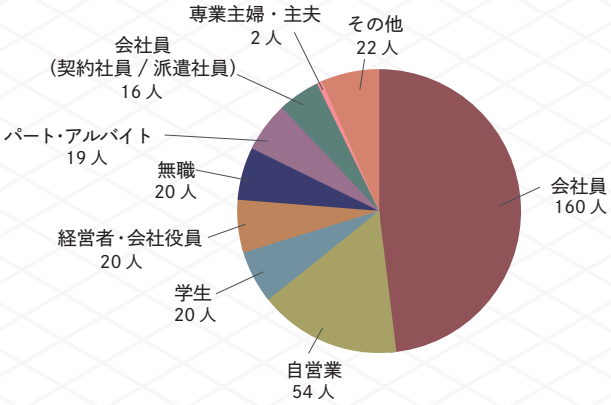
結果の概要

調査参加者の属性などについて尋ねたところ、年齢では 10 代から 70 代の方まで、幅広い世代から回答が得られました。その中でも、特に多い年代は 30 代・40 代の人々となっています。また、性のあり方については、戸籍上の性別、ジェンダー・アイデンティティともに男性の回答が過半数となっていました。そして、性的指向ではレズビアンもしくはゲイに該当する方が 216 名と最も多く、次いで「上記以外」と回答した方が多い結果となりました。性的指向の「上記以外」の回答では、アセクシュアルやパンセクシュアルと回答した方が比較的多い傾向がありました。また、LGBTQ+ のカテゴリー別に集計した結果ではゲイに当てはまる方が 176 名と最も多いことから、今回の結果が全ての性のあり方の傾向を均等に表しているわけではないことに留意する必要があります。

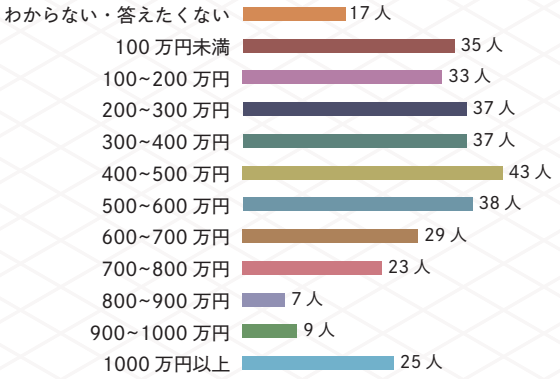
A. 最終学歴



B. 現在の職業

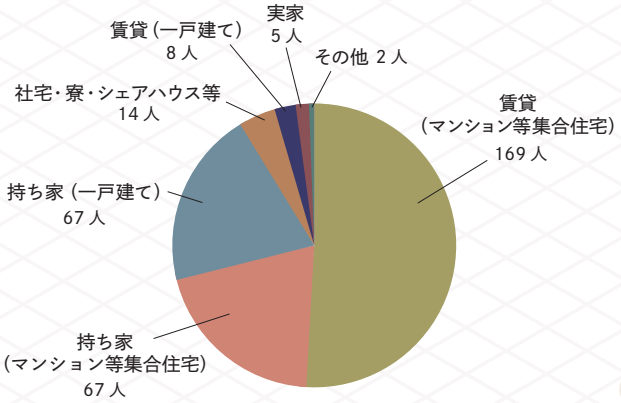


C. 現在の年収

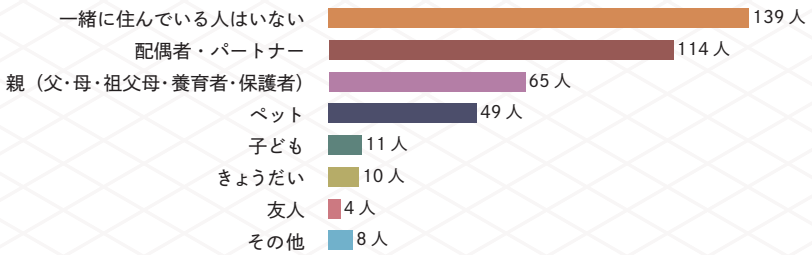


D. 居住地

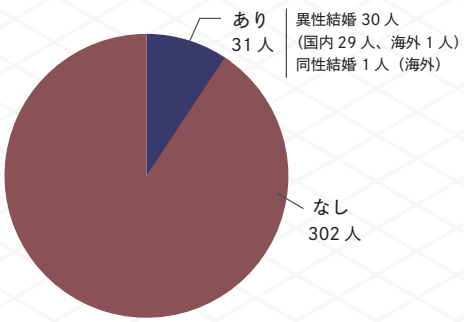
E. 居住形態



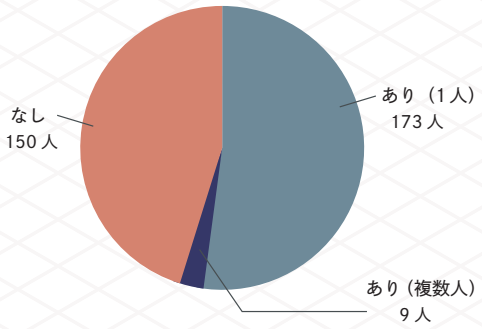
F. 現在同居している人物



G. これまでの結婚歴

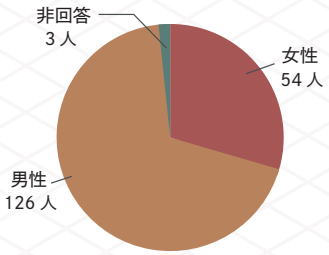


H. 現在のパートナーの有無

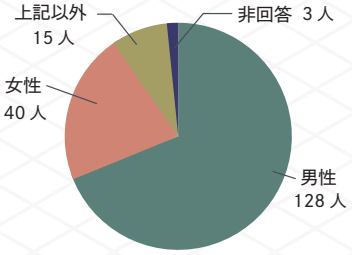


現在のパートナーの有無 を「あり」と回答した人への質問

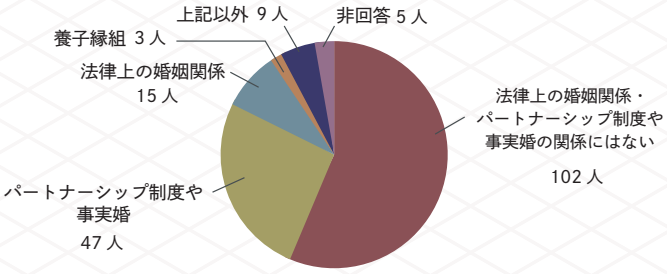
H-1. あなたのパートナーの戸籍上の性別



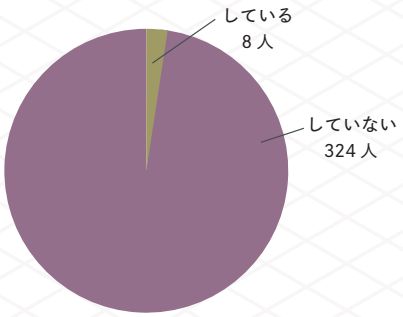
H-2. あなたのパートナーのジェンダー・アイデンティティ



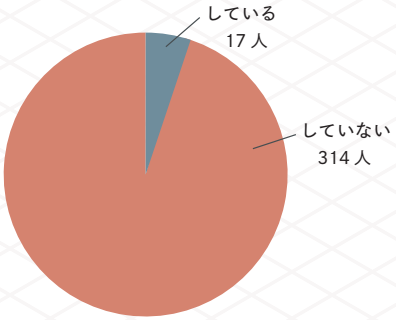
H-3. あなたとパートナーのパートナーシップの関係性



I. 子育てをしているかどうか



J. 介護をしているかどうか



結果の概要

続いて現在の生活について職業や住居、パートナーとの関係などを尋ねました。その結果、最終学歴については大学卒・大学院卒に当てはまる人々が多く、また現在の職業は会社員と回答した人が半数近い結果となりました。また現在の年収については 100 万円未満から 1,000 万円以上と、回答が幅広く分布していた傾向があります。最も多い 400 万～ 500 万円は、日本全体の平均年収ともおおよそ一致するものですが、100 万円未満、1,000 万円以上の両極にも一定数の回答があったことは、特徴的であると思われます。

また現在の居住地については東京都に在住している人が最も多く、その他についても関東圏に在住の人が比較的多い結果となりました。その居住形態については、賃貸（マンション等の集合住宅）に当てはまる人が多数を占めています。また、現在同居している人物については、一緒に住んでいる人はいない人が最も多い結果となり、次いで多いのは配偶者やパートナーと同居している人であることもわかりました。

そして、パートナーとの関係については、これまでに結婚した経験がある人が全体の内 31 名いました。その大部分は異性との結婚でしたが、海外で同性結婚を行った人も 1 名いました。現在のパートナーの有無については「あり」と回答した人が 182 名、「なし」と回答した人が 150 名とおよそ半々の結果となっています。「あり」と回答した人の内、パートナーの戸籍上の性別やジェンダー・アイデンティティについては「男性」と回答した人が多数でしたが、これは全体の回答者の中でゲイに該当する方が最も多かったことも理由であると考えられます。また、現在パートナーがいる人の中でも、全体の半数以上がパートナーシップ制度や事実婚の関係にはないということもわかりました。

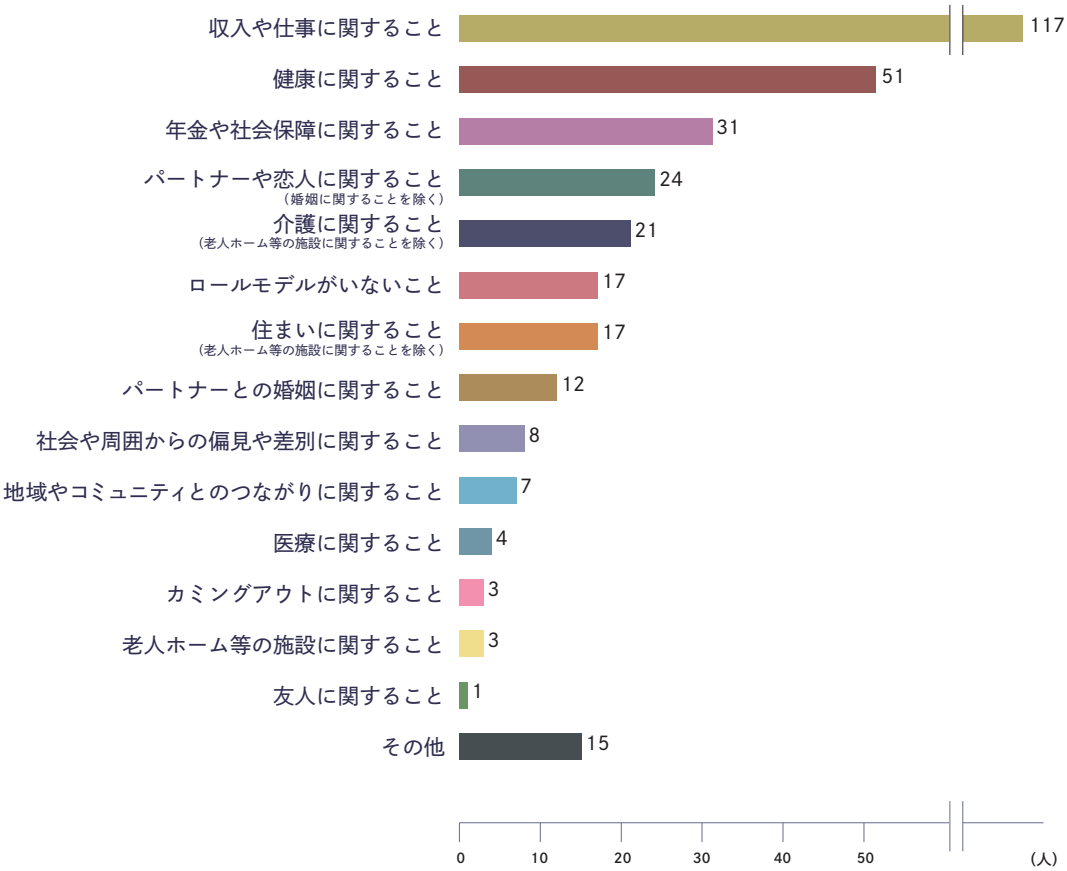
なお、今回の調査の中では、少数ではありますが、現在子育てをしている人、家族等の介護をしている人が一定数いることもわかりました。

3. 老後の不安について

老後に対して不安に感じることについて、選択肢の中から１位～５位を選んでもらいました。
その結果を順位ごとに、また、ジェンダー･アイデンティティ、性的指向、LGBTQ+ のカテゴリー別にまとめました。

不安の内容 １位

回答数 =331



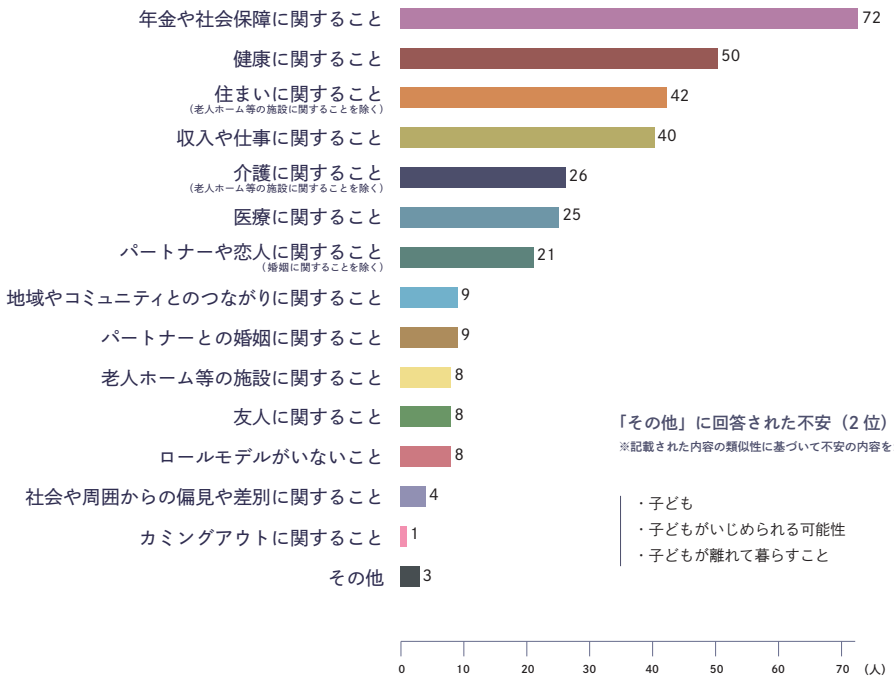
「その他」に回答された不安（1 位）の内容

※記載された内容の類似性に基づいて不安の内容をカテゴリー化したもの

- セクシュアリティゆえに、パートナーや家族ができない孤独さ
- 死生観
- 死の苦痛
- 親の介護
- 保証人や後見人がいない
- 障害のあるきょうだいの介護
- 死後の手続き
- きょうだい問題
- 家族の看取り
- 安楽死制度の有無
- 書籍と資料の相続
- きょうだい関係と相続

不安の内容 2位

回答数 =326



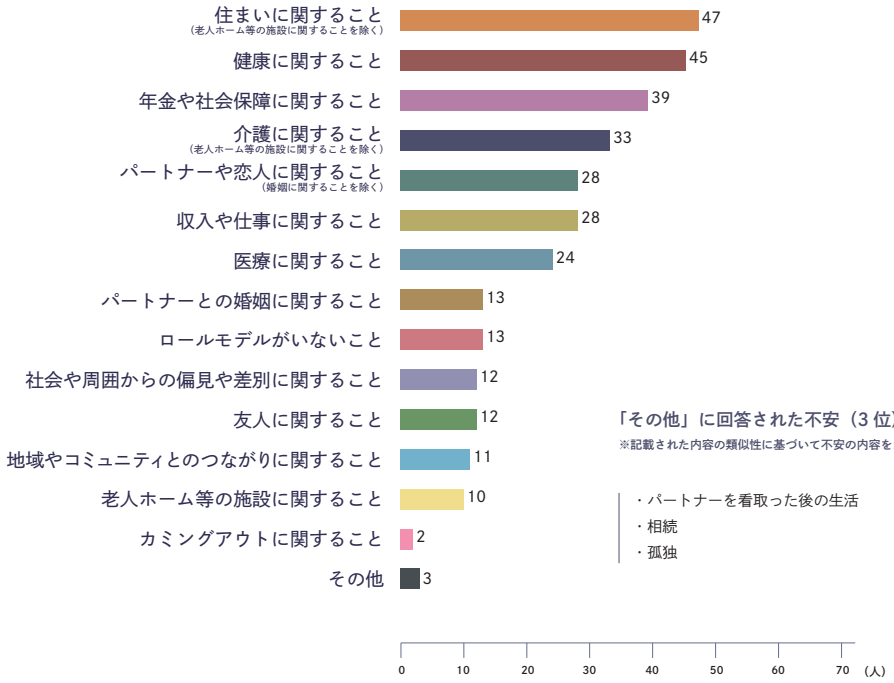
「その他」に回答された不安（2位）の内容

※記載された内容の類似性に基づいて不安の内容をカテゴリー化したもの

- 子ども
- 子どもがいじめられる可能性
- 子どもが離れて暮らすこと

不安の内容 3位

回答数 =320



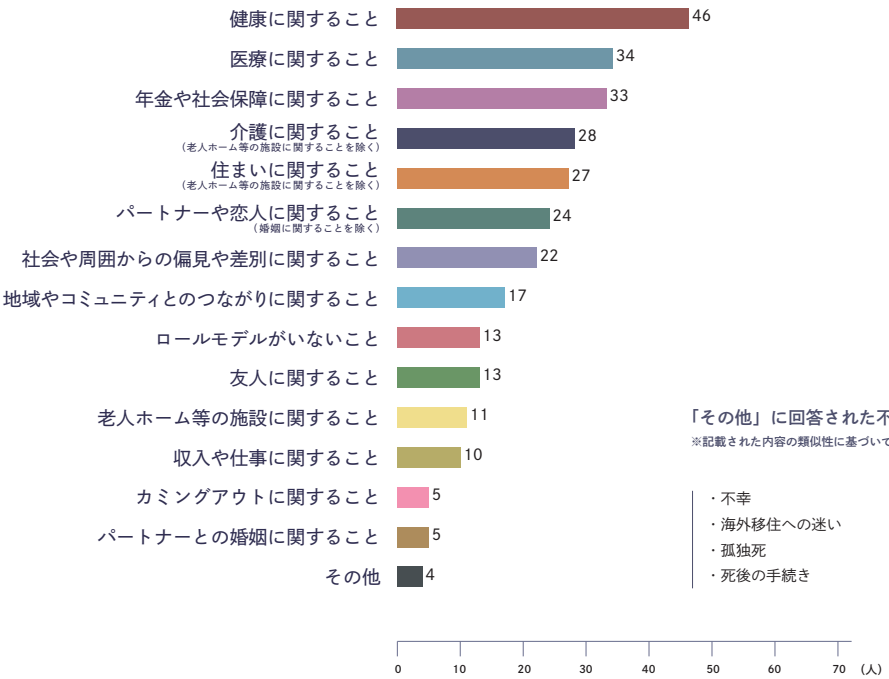
「その他」に回答された不安（3位）の内容

※記載された内容の類似性に基づいて不安の内容をカテゴリー化したもの

- パートナーを看取った後の生活
- 相続
- 孤独

不安の内容 4位

回答数 =292



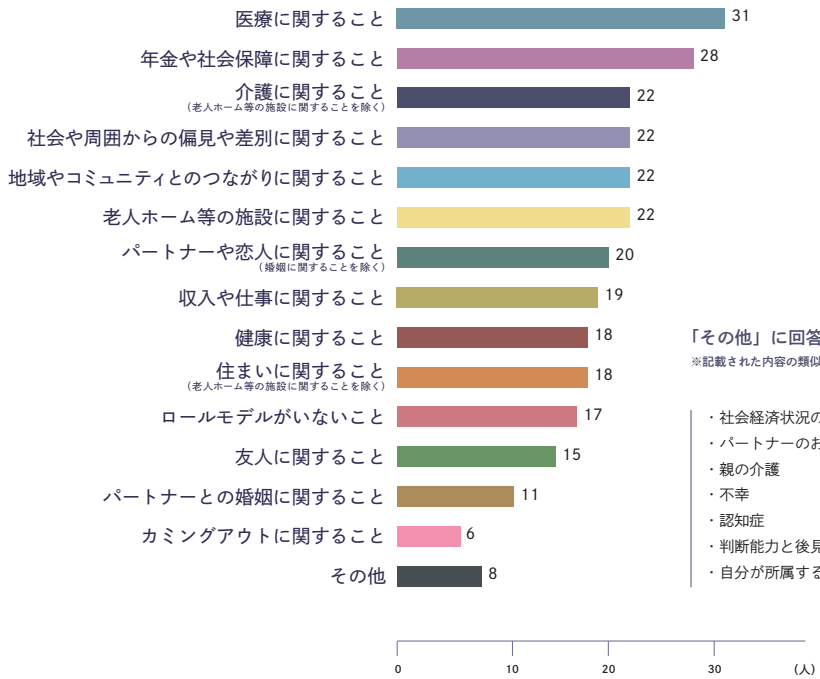
「その他」に回答された不安（4位）の内容

※記載された内容の類似性に基づいて不安の内容をカテゴリー化したもの

- 不幸
- 海外移住への迷い
- 孤独死
- 死後の手続き

不安の内容 5位

回答数 =279



「その他」に回答された不安（5位）の内容

※記載された内容の類似性に基づいて不安の内容をカテゴリー化したもの

- 社会経済状況の悪化
- パートナーのお墓
- 親の介護
- 不幸
- 認知症
- 判断能力と後見
- 自分が所属する複数の家族間の関係性

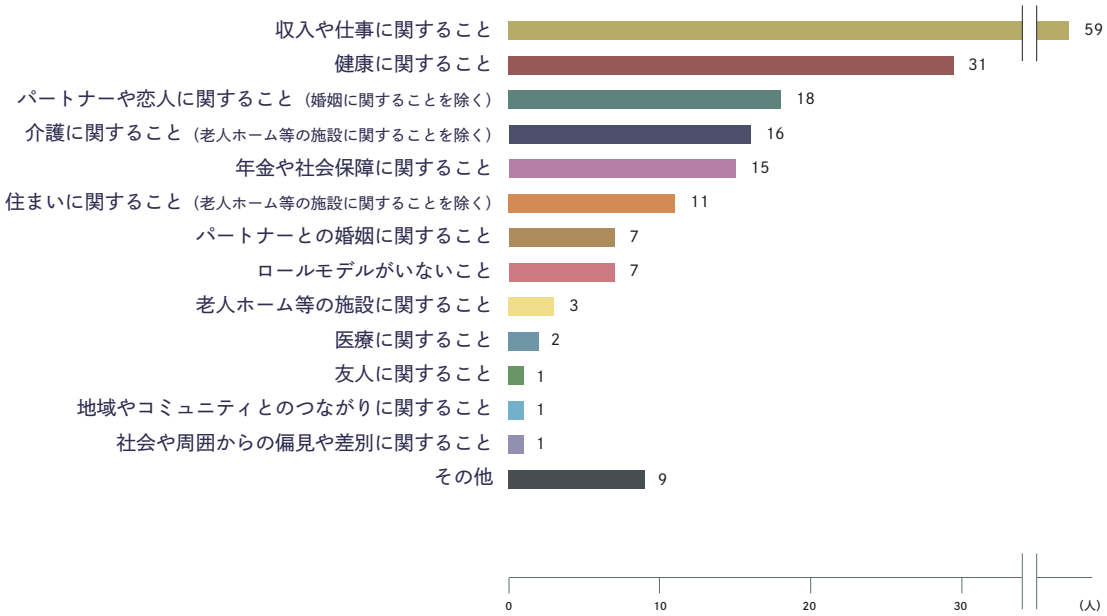
結果の概要

まず、「老後の不安について」感じることを1位から5位まで選んでもらい、順位ごとにまとめた結果では、1位に選ばれたものとしては「収入や仕事に関すること」「健康に関すること」「年金や社会保障に関すること」などの回答が多いことがわかりました。これらの回答は、2位から5位までの回答の中でも一貫して回答数が上位に位置しており、不安が強いことがわかります。一方で、回答数はそこまで多くないものの、「パートナーとの婚姻に関すること」や「社会や周囲からの偏見や差別に関すること」「カミングアウトに関すること」など、性のあり方と直接関係すると思われる項目も、1位から5位までの回答の中で共通して挙げられていました。

3-A. ジェンダー・アイデンティティ別 不安の内容 1位

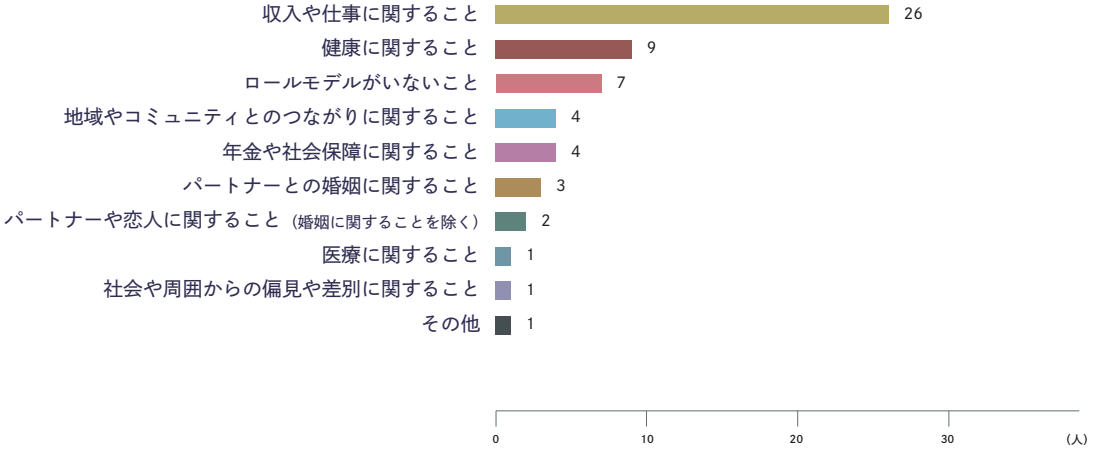
シスジェンダー男性

回答数 =181



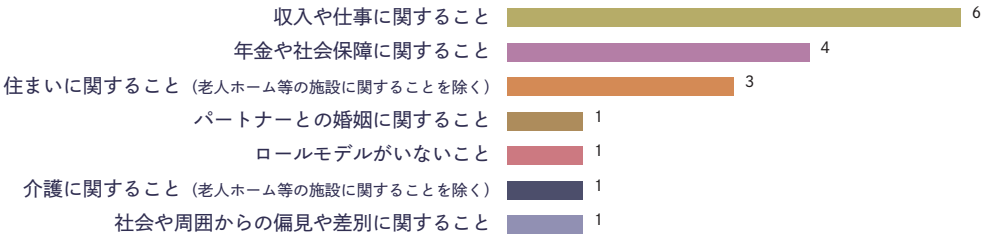
シスジェンダー女性

回答数 =59



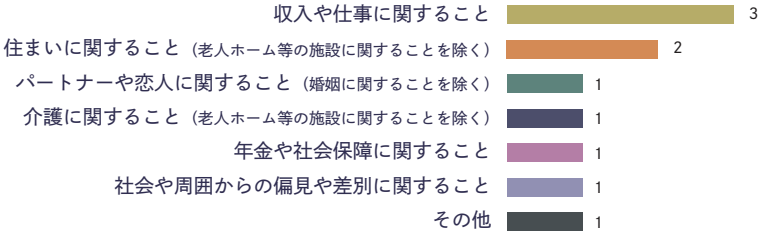
トランスジェンダー男性

回答数 =17



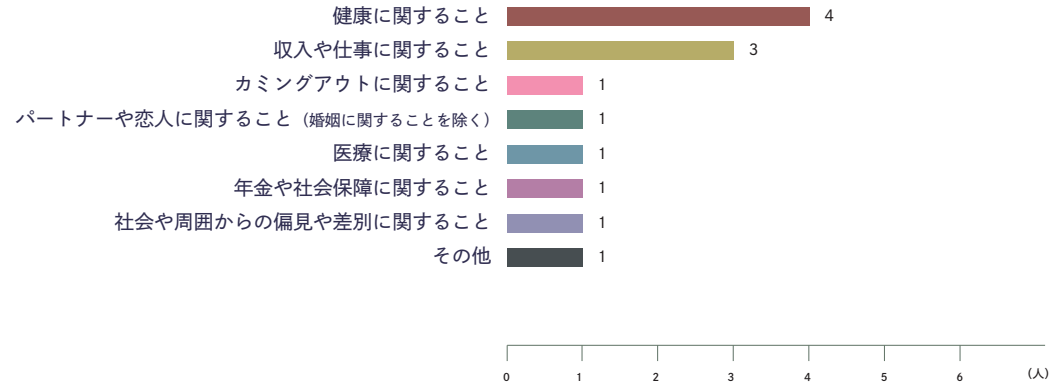
トランスジェンダー女性

回答数 =17



X ジェンダー

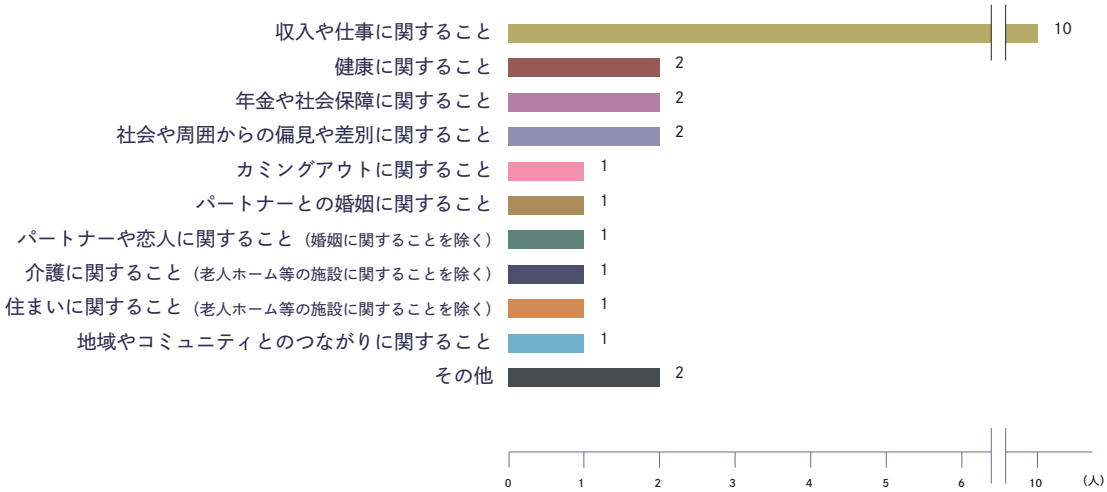
回答数 =13



3-A. ジェンダー・アイデンティティ別 不安の内容 1位

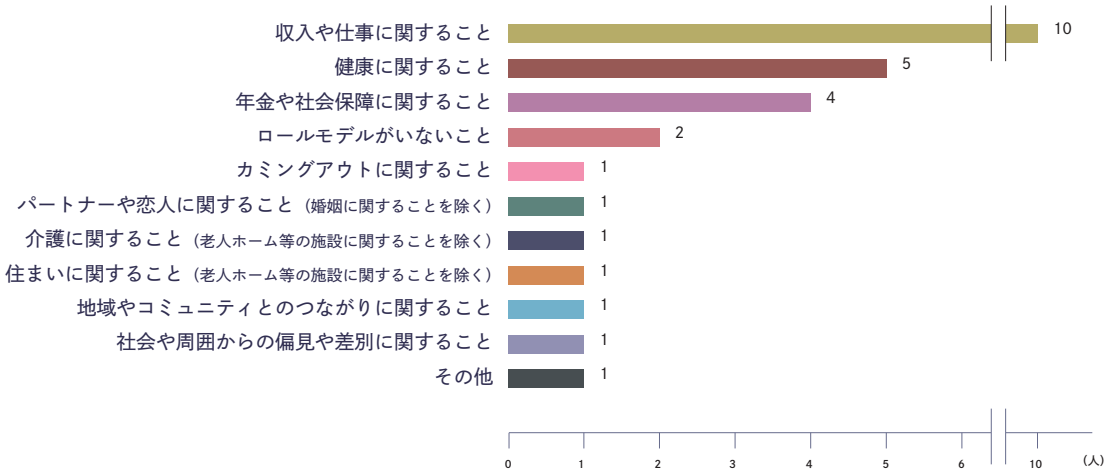
ノンバイナリー

回答数 =24



上記以外のジェンダー

回答数 =28



「その他」に回答された不安の内容

※記載された内容の類似性に基づいて不安の内容をカテゴリー化したもの

シスジェンダー男性

- 親の介護
- 保証人や後見人がいない
- 障害のあるきょうだいの介護
- 死後の手続き
- きょうだい問題
- 家族の看取り
- きょうだい関係と相続

シスジェンダー女性

- 安楽死制度の有無

トランスジェンダー女性

- 書籍と資料の相続

X ジェンダー

- 死の苦痛
- 安楽死制度の有無
- 死後の手続き
- 書籍と資料の相続

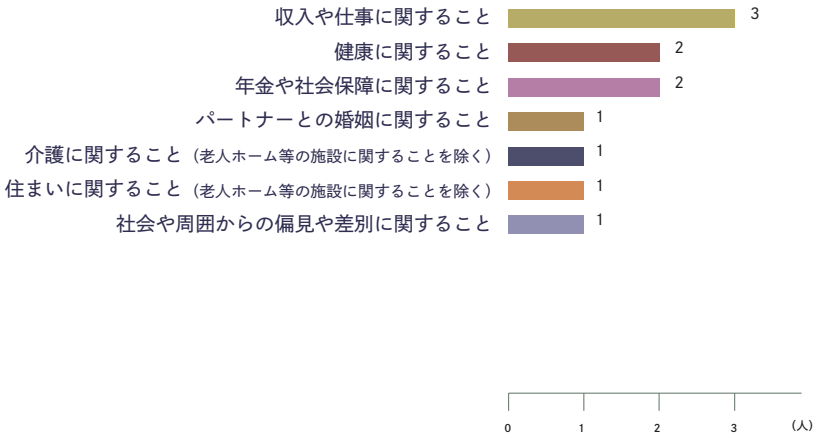
結果の概要

続いて、不安の 1 位として挙げられた回答を、ジェンダー・アイデンティティごとに集計しました。その結果、多くのジェンダー・アイデンティティの人々において「収入や仕事に関すること」が最も回答数が多い項目となりました。また、トランスジェンダー男性・トランスジェンダー女性においては、「住まいに関すること」が比較的上位の不安として挙げられていたことや、「健康に関すること」が含まれていないことなどが他のジェンダー･アイデンティティの人々と比べて特徴的でした。また、婚姻を含めてパートナーや恋人との関係についての不安が、回答数に差はあるものの多くのジェンダー・アイデンティティの人々に共通することもわかりました。

3-B. 性的指向別 不安の内容 1位

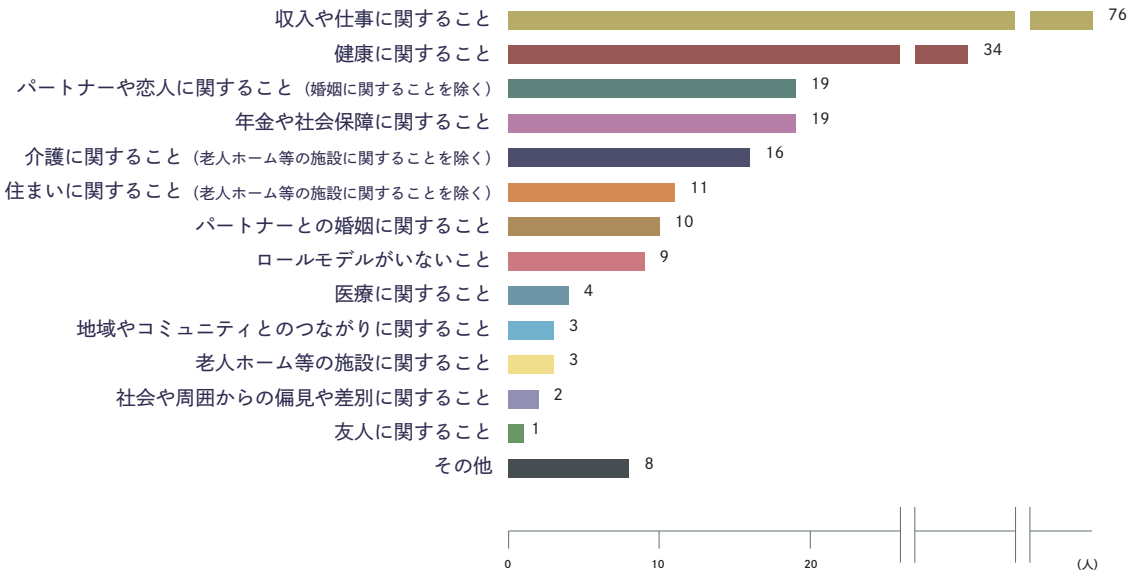
異性愛

回答数 =11



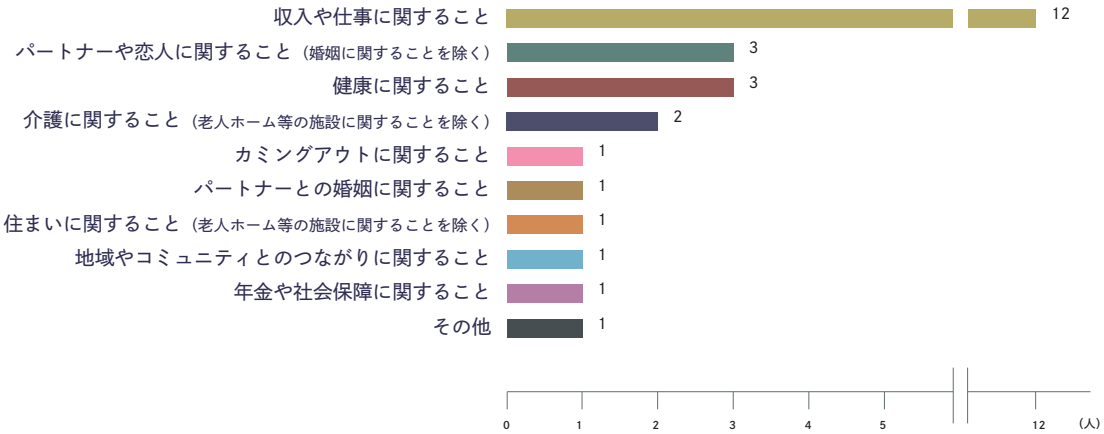
レズビアンもしくはゲイ

回答数 =215



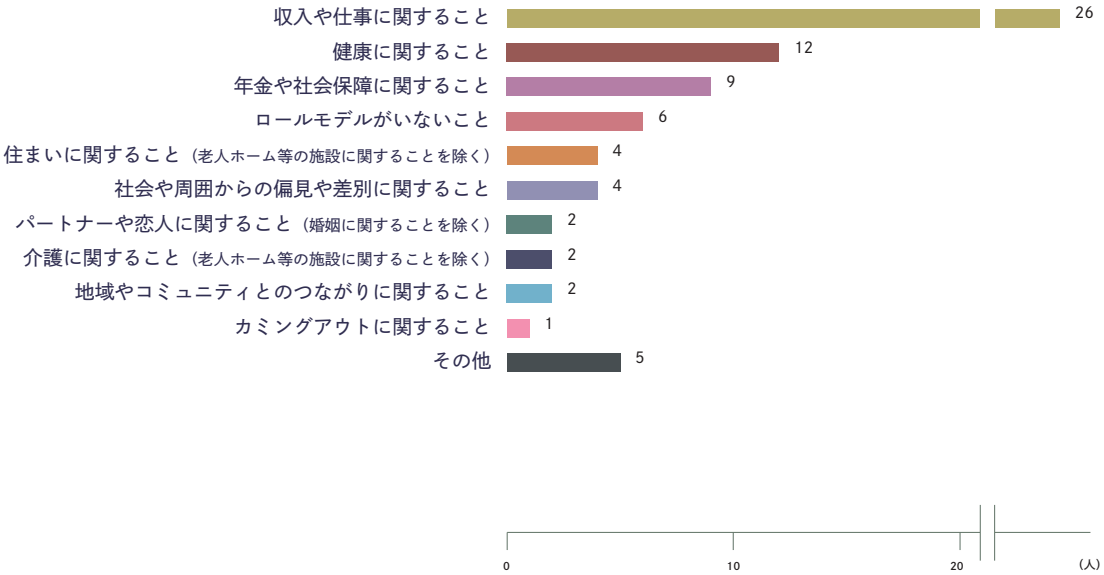
バイセクシュアル

回答数 =26



上記以外の性的指向

回答数 =73



3-B. 性的指向別 不安の内容 1位

「その他」に回答された不安の内容

※記載された内容の類似性に基づいて不安の内容をカテゴリー化したもの

レズビアンもしくはゲイ

- 保証人や後見人がいない
- 障害のあるきょうだいの介護
- 死後の手続き
- きょうだい問題
- 家族の看取り
- 安楽死制度の有無

バイセクシュアル

- 親の介護

上記以外の性的指向

- 死の苦痛
- きょうだい関係と相続
- セクシュアリティゆえに、パートナーや家族ができない孤独さ
- 死生観
- 書籍と資料の相続

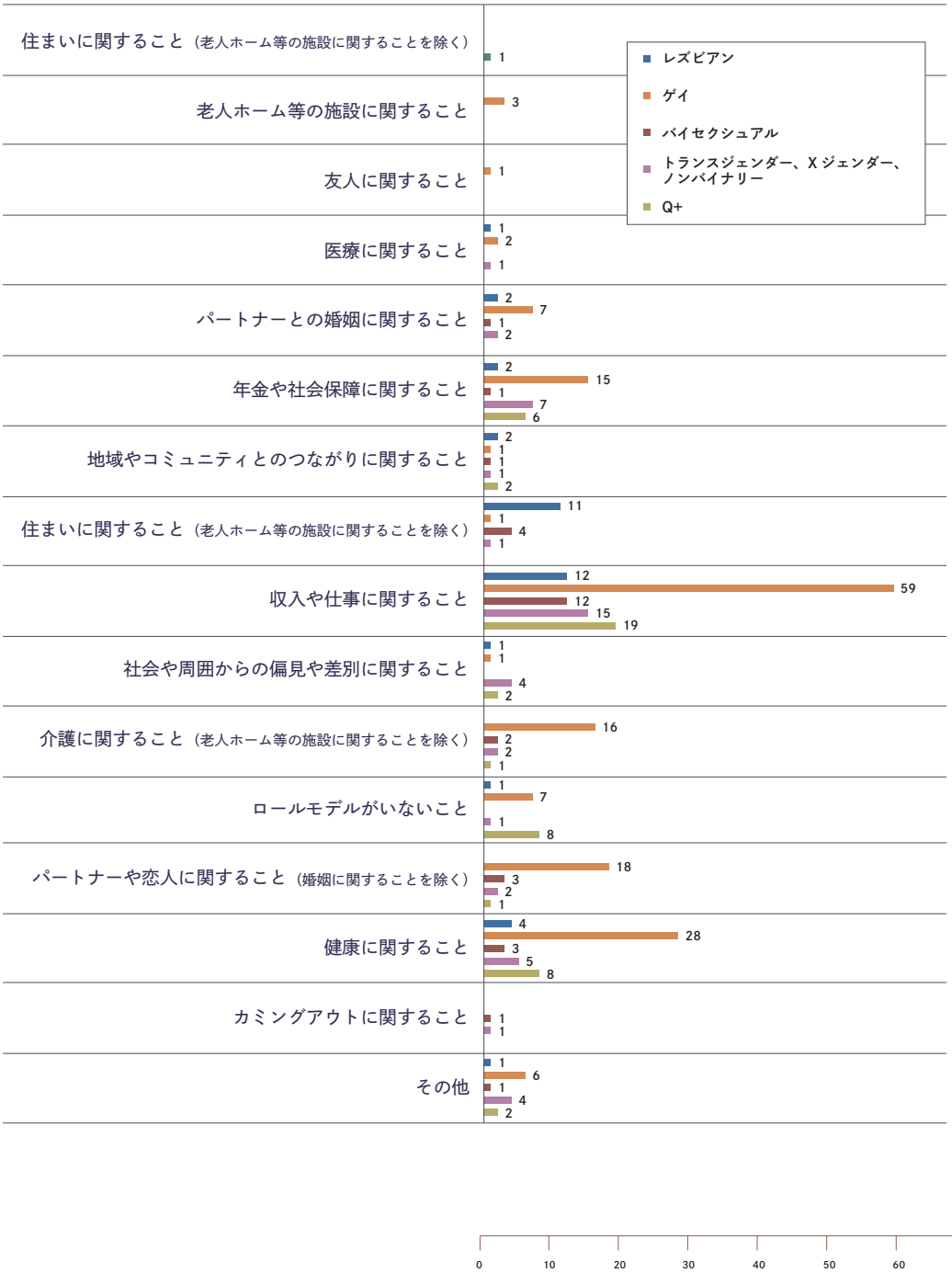
結果の概要

次に、不安の1位として挙げられた回答を性的指向ごとに集計しました。その結果、「収入や仕事に関すること」はどの性的指向においても最も回答数が多く、またレズビアンやゲイ、バイセクシュアルの人々は、パートナーや恋人との関係についての回答が比較的多いことがわかりました。一方で、レズビアンやゲイ、そして「上記以外の性的指向」に当てはまる人々は、「ロールモデルがいないこと」についても不安の1位として複数名から回答されていました。また、「その他」の回答から、レズビアンやゲイ、バイセクシュアルの人々は自身が介護を受けることだけでなく家族の介護について不安を感じている人が一定数いることも伺えます。

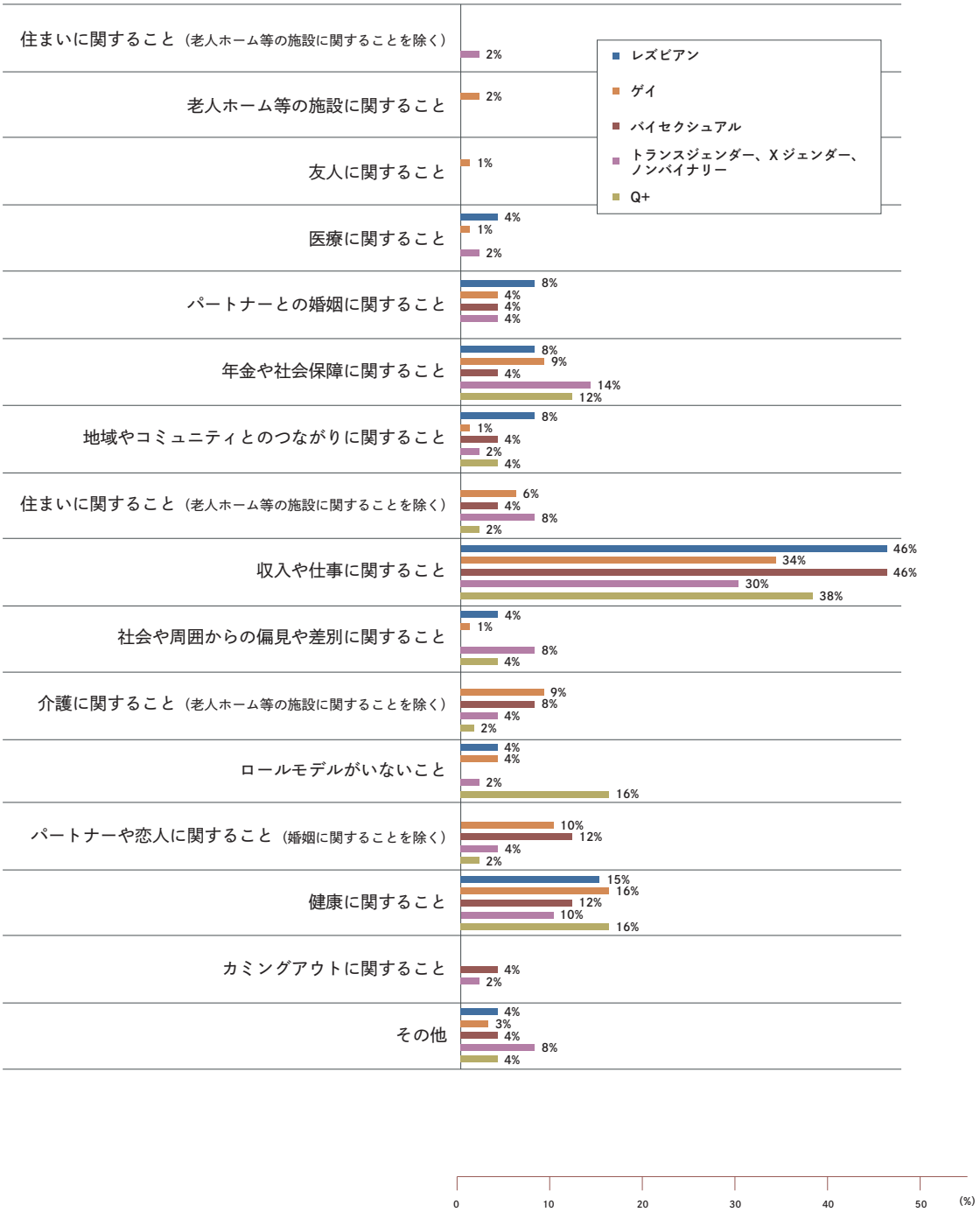
3-C. LGBTQ+ 別 不安の内容 1位（件数）

回答数 =313

※トランスジェンダー、Xジェンダー、ノンバイナリーの人々については、
ジェンダーに関わるアイデンティティとして1つのグループにまとめています。



3-C. LGBTQ+ 別 不安の内容 1位（%）



「その他」に回答された不安の内容

※記載された内容の類似性に基づいて不安の内容をカテゴリー化したもの

レズビアン

- 安楽死制度の有無
- 子ども
- 子どもがいじめられる可能性
- 親の介護

ゲイ

- パートナーを看取った後の生活
- 家族の看取り
- 海外移住への迷い
- きょうだい問題
- 死後の手続き
- 社会経済状況の悪化
- 障害のあるきょうだいの介護
- 相続
- 認知症
- 保証人や後見人がいない

バイセクシュアル

- 子どもが離れて暮らすこと
- 親の介護
- 不幸

Q+

- 孤独
- きょうだい関係と相続
- 死の苦痛
- 死後の手続き

トランスジェンダー

- セクシュアリティゆえに、パートナーや家族ができない孤独さ
- パートナーのお墓
- 孤独死
- 死後の手続き
- 死生観
- 書籍と資料の相続

結果の概要

最後に、不安の1位として挙げられた回答をLGBTQ+のカテゴリーごとに集計し、回答件数とカテゴリーにおける回答の割合をそれぞれグラフに示しました。その結果、「収入や仕事に関すること」ではレズビアンやバイセクシュアルの人々が多く回答していたこと、「パートナーとの婚姻に関すること」はレズビアンの人々の回答の割合が高いのに比べ、婚姻を除く「パートナーや恋人に関すること」ではゲイやバイセクシュアルの人々の回答の割合が高いことなどがわかりました。また、トランスジェンダーの人々は「社会や周囲からの偏見や差別に関すること」を他のカテゴリーの人々に比べ高い割合で挙げていることが示されました。そして、Q+の人々は「ロールモデルがいないこと」を極めて高い割合で挙げており、これにはLGBTの人々と比べてQ+の人々が社会の中で可視化されていないことなども理由として考えられます。

4. 老後の不安の「理由」と「解決方法」

老後の「不安の内容」について、その「理由」と「解決方法」を尋ねた質問への自由記述の回答の中から、LGBTQ+ に特徴的だと思われるものを拾い集め、６つのカテゴリーに分けてみました。

収入・就労

理由

- 収入が少ない（共通）
- 非正規･フリーランス･任期付き等で収入が安定しない（共通）
- 貯蓄が少ない／年金をもらえるかどうかわからない（共通）
- 企業が表向きだけではなく実質的にマイノリティの支援に取り組んでいるかわからず、就職先が選べない（20 代レズビアン）
- 「女性らしさ」から逸脱した見た目などのまま安定した雇用が今後得られるか不安（20 代ノンバイナリー女性）
- 性別適合手術等の費用など、お金がかかる（年齢不明トランスジェンダー男性）

解決方法

- 安定した雇用と十分な収入（共通）
- 貯蓄や資産形成（共通）
- 社会保障の充実（共通）
- 不安を共有できるコミュニティや相談窓口（40 代ゲイ、50 代パンロマンティック･アセクシュアル･ノンバイナリー）
- 働くうえでの男女二元論に基づいた規範が弱められること（20 代バイセクシュアル・ノンバイナリー）
- 就活セクシズムがなくなること（10 代アセクシュアル・ノンバイナリー）
- 老後も楽しく働けるスキルを身につける（40 代ゲイ）

健康・医療

理由

- 健康が何事においても基盤となる（共通）
- 加齢に伴って健康に問題が生じてくる（共通）
- 持病がある（共通）
- 健康ではなくなった時に世話をしてくれる人がいるか不安（40 代ゲイ、60 代レズビアン、20 代アセクシュアル・アロマンティック女性ほか）
- 健康状態によってパートナーとの関係や実家や家族との関係が変わるため（30 代ゲイ）
- ホルモン治療による副作用等が想定される（30 代男性）
- 医療関係者における正しい知識、理解、症例の不足（30 代男性）
- 緊急事態や入院、手術等に直面した場合にパートナーを家族として扱ってもらえないのではないか（40 代 X ジェンダー）

解決方法

- 規則正しい生活／運動／食事（共通）
- 医療関係者を含む多くの人の理解・知識の浸透（30 代男性）
- 単身者でも安心して気兼ねなくサポートを受けられる医療施設や福祉制度（40 代バイセクシュアル男性、40 代ゲイ）
- パートナー、友人との協力関係を築いておくこと、人とのつながり（30 代ゲイ、40 代バイセクシュアル女性）

年金・介護・社会保障

理由

- 将来、年金や社会保障制度が機能するか期待できない（共通）
- 将来がイメージできず、老後の日々の生活にどの程度費用がかかるのかわからない（40 代レズビアン）
- どんな保険に入れるのかわからない（10 代アセクシュアル・アロマンティック男性）
- 介護してくれる人がいない（30 代パンジェンダー・クワロマンティック女性、40 代ゲイ、30 代ゲイほか）
- 介護は誰がしてくれるのか、老人ホームに入れるのか（40 代ゲイ、60 代ゲイ）
- 自分自身のセクシュアリティを打ち明けない状態で介護を受けることはきついと感じる（20 代ゲイ）
- 埋葬、遺産の管理を頼める身内がいない（50 代 X ジェンダー）

解決方法

- 貯蓄／社会保障の充実（共通）
- 異性婚と同様の法的保護（40 代ゲイ）
- コミュニティでの助け合い（30 代ゲイ）
- 年金や社会保険に依存しない金融商品（40 代ゲイ）
- パートナーと入れる保険や法律的な保障（40 代バイセクシュアル女性）
- 同じセクシュアリティの人が集まる施設（20 代ゲイ）

パートナー・婚姻

理由

- 自分の死後等でパートナーが生活できるか不安
  （40 代ゲイ、50 代ゲイ、30 代レズビアン・ノンバイナリー女性ほか）
- 同性婚が認められていないためパートナーとの関係性が法的に守られていない
  （20 代ゲイ、30 代バイセクシュアル女性）
- パートナーがいないことによる孤独
  （20 代ゲイ、40 代戸籍上は同性愛女性）
- パートナーとの財産分与（40 代ゲイ）
- 社会的に家族として認められないことによる弊害や心理的負担（20 代レズビアン）

解決方法

- 婚姻の平等（同性婚）の法制化（共通）
- パートナーを見つけること（40 代ゲイ）
- 同性カップルへの社会の理解（20 代ゲイ）
- パートナー以外の人間関係、友達づくり、外部との交流
  （30 代バイセクシュアル・X ジェンダー、20 代ゲイ、30 代ゲイ）

ロールモデル・差別・偏見

理由

- 40 歳以上のゲイがどういう生活をしているのかがわからない（20 代ゲイ）
- 精神的な不安定さもあり、自分が高齢になるまで生きていられる気がしない
  （20 代アンドロロマンティック・パンセクシュアル・ノンバイナリー）
- 法整備の遅れやヘイトスピーチの増加など、安心して暮らせる環境にない状況がいつまで続くのか
  （30 代ゲイ、50 代パンセクシュアル女性）
- 老人ホームや介護サービスで性自認のとおり扱ってもらえるか
  （60 代トランスジェンダー女性）
- アロマンティックやアセクシュアルのコミュニティでは 20 ～ 30 代が多く、実際の老後生活を体験している人の話を聞くことができない（20 代アロマンティック・アセクシュアル女性、30 代デミセクシュアル、アロマンティック女性）

解決方法

- 法整備による差別と偏見の解消（共通）
- ロールモデルが増えること
  （30 代パンセクシュアル・トランスジェンダー男性）
- 60 歳以上の方々への調査（30 代ゲイ）
- さまざまな年代の当事者が、自分の経験や考えを自由に発信できる環境（20 代パンセクシュアル）
- 死後までミスジェンダリングされ続けたくないので、いずれかのタイミングでより広い範囲にカミングアウトしたい（20 代ノンバイナリー・パンセクシュアル）
- フィクションの作品に、より多くの当事者を自然な形で登場させ、ポジティブに描くこと
  （20 代パンセクシュアル）

住まい・地域・コミュニティ

理由

- パートナーと戸建てを購入したが、地域の輪の中に入っていけるのか（40 代レズビアン）
- 定住先の地域コミュニティの寛容さがわからないため、差別やマイクロアグレッションに晒されることが怖い
  （10 代 A ジェンダー・バイセクシュアル）
- 自分に合うコミュニティがあるか
  （20 代アセクシュアル・ノンバイナリー）
- 高齢単身だと賃貸契約がしにくいと話を聞いたため
  （30 代ゲイ、40 代ゲイ）

解決方法

- 差別のないコミュニティ（20 代アセクシュアル・ノンバイナリー）
- 気軽に立ち寄れる居場所
  （20 代アロマンティック、キュピオセクシュアル女性）
- 人とのつながり（20 代無性愛女性）
- 自分からオープンに地域の輪に入る（40 代レズビアン）
- LGBTQ+ に関係なく、高齢単身でも安心して賃貸契約できるシステムや制度（30 代ゲイ）

本調査は、LGBTQ+ 当事者の人々が老後の生活に対してどのような不安を抱えているか、明らかにすることを目的として実施しました。老後の生活で最も不安に感じることについては、調査参加者の約 60% が「収入や仕事に関すること」「健康に関すること」「年金や社会保障に関すること」などのお金や暮らしに関する現実的な問題を回答しました。これは必ずしも LGBTQ+ の人々に特有の問題ではありませんが、これらの項目を 1 位の不安として選んだ理由（pp.26-27 を参照）には「扶養関係にないため自立する必要があるから」や「『女性らしさ』から逸脱した見た目などのまま安定した雇用が今後得られるか不安だから」「法的な保護がないから」「子や孫がいないので社会保障が機能しないと自分の老後に直結するから」などが挙げられていました。このことから、お金や暮らしなどの不安の背景には性のあり方によって就労の困難が生じたり、社会保障を性的マジョリティの人々と同等に受けづらい、あるいは、社会保障や法的な保護の有無が生活状況に直結しやすいなどの問題が存在することが考えられます。

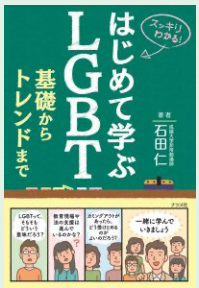
本調査ではあわせてこれらの不安を解決するために何が必要だと思うか（pp.26-27 を参照）についても尋ねていますが、多くの人が「安定した雇用と十分な収入、貯蓄や資産形成、社会保障の充実」などを挙げた一方で、「自分のセクシュアリティについてオープンに話せる雰囲気や福利厚生の整っている職場」「働く上での男女二元論に基づいた規範が弱められること」「医療関係者を含む多くの人の理解・知識の浸透」「異性婚と同様の法的保護」などの回答も見られました。このことから、LGBTQ+ の人々が老後の暮らしや生活に対して抱く不安を解消するためには、健康で長く働くことができるための多様性に理解のある職場づくりや、医療・福祉的サポートなどを受けやすい社会の構築、社会保障における LGBTQ+ の人々とそれ以外の人々における不均衡の解消などが課題であると思われます。また、なかには「婚姻制度や会社の制度に依存しない社会保障制度」を解決策として挙げている方もいました。結婚しているかどうかや就業の形態などに関わらず、困っている人々がサポートを享受しやすい社会制度を作っていくことも、多様性のある社会を築いていくために重要な視点であるといえるでしょう。

関連参考図書

『SOGI をめぐる法整備はいま』
LGBT 法連合会（編）
かもがわ出版／ 2023 年

『LGBT 専門医が教える心・体そして老後大全』
針間克己（著）
わかさ出版／ 2020 年

『性的マイノリティサポートブック』
社会福祉法人共生会 SHOWA（編著）
かもがわ出版／ 2021 年

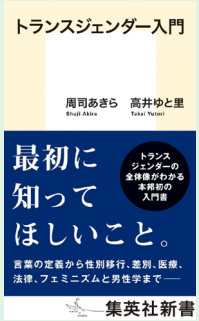


『はじめて学ぶ LGBT 基礎からトレンドまで』
石田仁（著）
ナツメ社／ 2019 年

そして、お金や暮らしに関する不安のほかには、「パートナーや恋人に関すること」や「社会や周囲からの偏見や差別に関すること」「ロールモデルがいないこと」なども、1位から5位までの全ての質問において挙げられていました。これらの不安をLGBTQ+のカテゴリーで比較すると、パートナーとの婚姻に関することはレズビアンの人々が、婚姻を除くパートナーや恋人との関係についてはゲイやバイセクシュアルの人々の回答が比較的多いことがわかります。本調査で現在パートナーがいると回答した人の中でも「婚姻関係やパートナーシップ制度などの関係にはない」と回答した人が大半（56%）であったことから、多くの地方自治体などでパートナーシップ制度などの施策が進められつつある現状においても、まだまだそれらの制度が利用しやすい状況にあるとはいえず、婚姻やパートナーシップの問題はその他にも回答された「老後の孤独」の不安と向き合うための重要な問題であると考えられます。これは解決策として挙げられたように、婚姻の平等が法的に認められるだけでなく、同性を含めた多様なパートナーシップに対する社会の理解も必要不可欠であることを表しているのではないかと思います。

また、社会や周囲からの偏見や差別に関することについては，トランスジェンダーの人々における回答がほかよりも多いことが示され、具体的には法整備の問題やヘイトスピーチの増加、老人ホームや介護の現場で性のあり方に対する理解や配慮がなされるかという不安などがあることも理由として挙げられていました。これらの回答からは、差別や偏見のない社会づくりを法律や行政が率先して行っていく必要性はもちろんですが、医療や福祉サービスの従事者がLGBTQ+に関する専門的な知識を持って支援に取り組めるよう、教育体制の充実や新たなサービスの展開も考えていく必要があると思われます。

そして、ロールモデルがいないことについては、Q+に該当する人々が比較的高い割合で回答していることもわかりました。これは、メディア等で比較的目にすることの多い「LGBT」の人々に比べて、Q+の人々は日常の中で得られる情報量の差によってロールモデルを形成しにくい可能性が考えられます。LGBTQ+の人々が人生全体にわたるキャリア・プランやライフ・プランを立てていくためには、当事者同士が安心してつながることのできるコミュニティづくりや、メディアで多様な性を取り上げたり、こうした調査を通じてさまざまな世代のLGBTQ+当事者の姿を可視化していくことが重要であるといえるでしょう。



『トランスジェンダー入門』
周司あきら、高井ゆと里（著）
集英社／ 2023年

『LGBTとハラスメント』
神谷悠一、松岡宗嗣（著）
集英社／ 2020年

『「地方」と性的マイノリティ
東北6県のインタビューから』
杉浦郁子、前川直哉（著）
青弓社／ 2022年

『還暦越えトランスジェンダーの
「まだこれから」』
小嶋小百合（著）
文芸社／ 2023年

LGBTQ+ の高齢期における現状と課題

藥師 実芳

認定 NPO 法人 ReBit 代表理事
社会福祉士

残念ながら現状日本では、LGBTQ+は高齢期や死後にその尊厳が尊重されない現状があります。一方でその現状や不安の声は可視化されづらく、課題として提起されづらいことから本調査は非常に大きな意義があります。なお、LGBTQ+ の支援に携わる社会福祉士という視点から、現場で可視化している LGBTQ+ の高齢期の課題について、以下記載します。

（1）同性パートナーが家族として扱われないことで、医療・行政・介護サービスでの困難が生じやすい

日本では戸籍上同性同士の婚姻ができないことから、法律上の家族になることに大きなハードルがあります。特に高齢期においては、医療や介護等の行政サービスを受ける機会が増えることから、困難が顕著になります。

医療現場の多くでは未だ同性パートナーが家族として扱われないことから、病状や治療方針を知れない、入院手続きや医療同意ができない、緊急連絡先に指定できない、ICU に入れない、看取りができない等、さまざまな困難があります。また、行政サービスでも、法律上の家族や親族でないと取得できない書類や、申請できない行政サービスも多く、家族として高齢期をサポートすることが難しい状況が生じています。また、介護サービスを受ける際にも、ハラスメント等を恐れ介護職等に同性パートナーであると伝えられなかったり、伝えても理解がされない現状から、長年連れ添ったパートナー同士が別の施設で暮らすことになったり、「友達です」等と嘘をついて面会をしなければならない等、人生の最期の時期が自分らしくあれないという課題もあります。

なお、この状況はご本人が認知症等で意思決定や主張がしづらい／できなくなると、さらに困難が増し、後見人や支援者に理解がないことでパートナーが他人として扱われたり、本人のセクシュアリティを尊重しない意思決定がされることが増えてしまいます。また、困難は死後も続きます。同性パートナーが法律上の家族でないことから死亡届等の行政手続きができなかったり、親族が許可せず葬儀に出られなかったり、共同で築いてきた資産が亡くなったパートナーの名義であれば自分のものでなくなってしまったりと、困難が重なっていきます。

（2）トランスジェンダーの医療・行政・介護サービスでの困難

医療・介護では男女に分けられる機会も多く、特にトランスジェンダーは性自認を尊重されない機会が増えてきます。例えば、性自認が女性であるにも関わらず、医療・介護等の施設で男性部屋に入ることを余儀なくされたり、男性者の服を支給されたり、おじいちゃんと呼ばれたり、本人の同意なく男性介助者に排泄やお風呂のケアをされたりと、尊厳がない生活を強要されることも少なくありません。また、死後においても、自認する性別と異なる性別の戒名をつけられたり、棺に入る際に性自認と異なる服装やメイクをされたり、遺影を性自認と異なる表現のものにされたりと、自分らしく最期を迎えられないことは少なくありません。

（3）孤独・孤立

なお、LGBTQ+ の高齢者は孤独・孤立に陥りやすい現状があります。シングルで高齢期を迎える方も多く、また同性パートナーはいても子どもがいないことが多く、パートナーが亡くなると家族や身内がいなくなる方も少なくありません。また、LGBTQ ＋コミュニティはゲイバー等の飲み屋での友達づくりや交流の機会が多い一方で、高齢期にはそれらに集うことができず、孤立をしていくことも少なくありません。

海外では LGBTQ+ の高齢期を支えるさまざまな団体があります。アメリカの SAGE（https://www.sageusa.org）は高齢期の LGBTQ+ のための相談支援、居場所づくり、食事や住居の提供、福祉・医療職への啓発、調査･政策提言を行っています。今回の調査をはじめ、今後日本での LGBTQ+ の高齢期に関する調査･提言が増え課題を可視化するとともに、LGBTQ+ の高齢者を包摂したサービスが増えることで、LGBTQ+ も尊厳をもち高齢期を過ごせる社会づくりが願われています。

あとがき

佐藤 洋輔
埼玉学園大学人間学部

2007年に日本が超高齢社会に突入して以来、「いかに幸福な老後を過ごすか」ということが 多くの人にとっての課題となっています。これは、多様な性のあり方を持つ LGBTQ+ の人々も例外ではありません。しかしながら、これまで LGBTQ+ の高齢者や、LGBTQ+ の老後の生活について、わが国ではほとんどスポットライトが当てられてきませんでした。このような現状のギャップを埋めるための一歩として、本調査は実施されました。

調査を実施してわかったこととしては、LGBTQ+ の人々が老後に対して抱く不安は、必ずしも彼らに特有の問題だけではないということです。むしろ、回答の上位を占めていたのは、お金や健康、住まいなど暮らしに関するものでした。これらは、LGBTQ+ の人々だけでなく、老後を迎える多くの人にも共通する問題です。しかし、その理由や、ともに挙げられた不安の内容を細かく見ていくと、就労上の困難や、社会保障を受ける機会の不均衡さ、法的な婚姻が認められない状況下でパートナーと長期的な関係を築いていけるかなど、その性のあり方と結びついたさまざまな不安が、安定した生活基盤の形成に対する不安を強めていることが伺えます。

実際に、これまでの多くの先行研究からは、偏見や差別の体験や、周囲からの拒絶に対する恐れ、自分自身に対する否定的な感情などの社会的マイノリティ固有のストレスが、当事者の問題対処能力や、周囲からサポートを受ける機会を奪い、精神疾患の罹患や、社会からの孤立に結びつくことが報告されています。そうなれば、自ずと職場で円滑な対人関係を築いたり、健康的な労働生活を送ったりすることも難しくなり、生活基盤が揺らいでしまうことも十分に考えられます。そして、より深刻な問題として、自死の危険性が高まることも考えられるでしょう。今回の調査結果や、数々の先行研究の報告から言えることとしては、現実的な生活の問題と、その性のあり方に由来する問題とは、決して分けることのできない問題であり、相互に影響を与え合う関係にあるのではないかということです。そして、そのような循環の中で、年齢が上がりライフステージが次の段階に進んだときに、また新たな生活上の不安と、性のあり方に由来する困難が生じてくることが考えられます。生活上の問題、LGBTQ+ 特有の問題、そして生涯発達における課題、これらを別個ではなく、統合的に捉えようとする視点の重要性が本調査では強調されたように思います。

また、調査の結果からは、LGBTQ+ の人々の中でも、その性のあり方によって最も不安に感じることはそれぞれ異なる可能性も示されました。これはある意味当たり前のことかもしれませんが、実際には見落とされやすい点でもあるのではないかと思います。より良い社会を形成していく上で、LGBTQ+ の多くの人々に共通する課題を解決することはもちろん大切ですが、実際の支援や環境調整の場面では、当事者一人一人のニーズを把握して、柔軟に対応する視点も持ち合わせなければ、社会が変わったとしてもその人が生きやすくなるとは限りません。特に、未だ十分に焦点が当てられていない Q+ の人々に対しては、その人生全体にわたる体験を丁寧に聞き取り、可視化していく取り組みが求められていることが本調査からは示されたのではないでしょうか。

最初に述べたように、今回の調査は LGBTQ+ の人々が幸せな老後の生活を送るための、あくまで第一歩に過ぎません。しかし、今後より高齢化が加速すると思われる日本社会において、これまでほとんど焦点の当てられてこなかった LGBTQ+ の人々が抱く老後の不安を明らかにした点で、意義のあるものではないでしょうか。今回の結果を基にして、今後は今を生きる LGBTQ+ の高齢者の人々にも協力していただきながら、より多くの当事者の人々が安心して老後を迎えることができるよう、引き続きの取り組みを進めてまいりたいと思います。

プライドハウス東京レガシー

「プライドハウス東京」は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、団体（NPO）、専門家、企業、大使館などがセクターを超えて連携し、設立されたコレクティブインパクト型のプロジェクトです。2023年4月1日からNPO法人として運営されています。当法人が運営する「プライドハウス東京レガシー」は、2020年10月11日、日本初の常設の総合LGBTQ+センターとして、新宿御苑駅（地下鉄丸ノ内線）から徒歩1分のビルの2階に開設されました。約3,000冊の書籍を所蔵するライブラリーや情報コーナーを併設し、LGBTQ+に関する情報を発信しています。また、相談事業も展開し、誰もが安心・安全に過ごせる居場所を提供しています。

プライドハウス東京レガシー

住所　〒160-0022
東京都新宿区新宿1-2-9
JF新宿御苑ビル2階

開館時間　月・火・金・土・日 13：00～19：00
休館日　水・木

どなたでも、無料でご利用いただけます。

ご寄付も受け付けています　All donations welcome!

詳細はホームページをご覧ください

http://pridehouse.jp/

Facebook
@PrideHouseTokyo

X（旧 Twitter）
@PrideHouseTokyo

Instagram
@PrideHouseTokyo

LGBTQ+ いのちの相談窓口

LGBTQ+当事者やそうかもしれない人を対象に、普段の生活の中で抱える困りごとや悩み、生きづらさを相談できる窓口です。LGBTQ+当事者の相談支援経験のある専門相談員が、対面（プライドハウス東京レガシー）またはオンラインで応対します。

- 無料・事前予約制 -

予約フォーム

LGBTQ+当事者の老後の不安に関するアンケート調査　～誰もが安心して過ごせる老後を目指して～
2023年12月 発行
発行：認定特定非営利活動法人グッド・エイジング・エールズ
編集：山縣真矢　**デザイン**：山本そよか